

目次

第21回大会報告

研究発表・シンポジウム

総会報告

第21回大会を終えて……………松島 のり子

第22回大会へのご案内……………師岡 章

研究発表・参加記……………名取 奏・赤荻 泰輔・田中 茉莉子

渡辺 一弘・寒河江 芳枝・上垣内 伸子

愉フォロ会報告……………塩崎 美穂・福島 友

新入会員・会員異動 / 寄贈図書

機関誌編集委員会・事務局からのお知らせ

第21回 大会報告

第21回大会は、2025年12月13日（土）にお茶の水女子大学国際交流留学生プラザにて、対面で開催されました。大会の詳細は以下の通りです。

研究発表

12月13日（土）09:00-13:00

司会：高田 文子（白梅学園大学）

上垣内 伸子（お茶の水女子大学）

(1) 09:00-09:30

「活水女園」の歴史

前田 志津子（元 活水女子大学）

(2) 09:30-10:00

「岩の坂貫い子殺し事件」（1930年）に関する新聞報道とジャーナリズムー「貫い子殺し事件」のミクロストリアー

浅野 俊和（中部大学）

(3) 10:00-10:30

ナチス・ドイツの幼児教育にみられる反ユダヤ主義ー絵本『狐とユダヤ人を信じるな』を中心にー

勝山 吉章（福岡大学）

(4) 10:30-11:00

1960年代イタリアにおける Ada Gobetti の思想がレッジョ・エミリア教育に与えた影響

田中 茉莉子（東京大学（院））

(5) 11:00-11:30

戦後のキリスト教保育者養成における夜学の役割ー保育専門学校の必要性に着目してー

中村 早苗（草苑保育専門学校）

(6) 11:30-12:00

戦後（60年代から2020年頃）乳児保育を巡る論点の変遷と歴史的考察ー金田利子らの乳児保育に関する著作を資料としてー

金田 利子（静岡大学（名））

齋藤 政子（明星大学）

寒河江 芳枝（帝京大学）

12:10-13:00 総合討論

総会（次頁） 14:00-15:00

シンポジウム 15:30-17:45

対面・オンライン併用

オンラインのみ一般公開

主催：幼児教育史学会

お茶の水女子大学人間発達教育科学研究所

後援：お茶の水女子大学ジェンダー研究所

テーマ：レッジョ・エミリアの

市立幼児学校と女性運動の歴史

○講演者：Sabine Lingenauber（Fulda University of Applied Sciences）

Janina von Niebelschütz（Fulda University of Applied Sciences）

○指定討論者：小玉 亮子（お茶の水女子大学）

○司会者：一見 真理子（お茶の水女子大学）

総 会 報 告

14:00 より大会会場において第 21 回総会が開催されました。(議長：高田会員)

報告事項

1. 第 20 回大会年度 (2024.10.1~2025.9.30) 会務報告

◇浅井事務局長より、会員数ならびに第 20 回大会の開催について報告された。

(1) 会員数：2025 年 11 月末現在、161 名。

(2) 第 20 回大会：2024 年 12 月 7 日、福岡大学にて開催された。大会参加者は約 60 名。

2. 編集委員会報告

◇浅野編集委員長より、機関誌第 20 号の刊行について報告された。

- ・ 『幼児教育史研究』第 20 号、2025 年 11 月 10 日付で発行。
- ・ 編集委員長は浅野理事(投稿論文担当)、編集副委員長は塩崎理事(書評担当)。
- ・ 投稿論文は 7 本、掲載は研究ノート 3 本。その他大会シンポジウム記録、書評 2 本、図書紹介 1 本を掲載。昨年度より豊富な内容となった。

3. 会報の発行について

◇浅井事務局長より、会報の発行について報告がなされた。

- ・ 39 号を 2025 年 2 月に、40 号を同年 6 月に発行し、Web 版を HP にアップロードした。

4. その他 特になし

審議事項

1. 第 20 回大会年度 (2024.10.1~2025.9.30) 決算
◇松島理事(会計担当)より、資料 1*「第 20 回大会年度幼児教育史学会収支報告」に基づき報告がなされ、会計監査の布村会員の報告を経て、承認された。

2. 第 21 回大会年度 (2025.10.1~2026.9.30) 事業計画

◇浅井事務局長より、第 21 回大会年度事業計画について説明され、承認された。

(1) 『幼児教育史研究』第 21 号の編集

- ・ 機関誌第 21 号の編集委員長、副編集委員長を選出する。
- ・ 申し合わせにより、正副編集委員長は 1 年交替とし、委員長は翌年副委員長として残り、業務の円滑な引継ぎを図る。
- ・ 稲井理事を編集委員長に推薦し、浅野理事を副委員長とする体制で進めたい。

(2) J-STAGE 上での機関誌公開について

- ・ 『幼児教育史研究』第 20 号は、2026 年の早い時点で公開予定。

(3) 会報の発行

- ・ 従来通り 2 月頃(第 41 号:第 21 回大会報告)、6 月頃(第 42 号:第 22 回大会案内)を予定している。会員研究情報などの充実に努める。

(4) 第 22 回大会の予定

- ・ 会場：白梅学園大学(東京)
実行委員長：師岡 章会員
- ・ 日程：2026 年 12 月 5 日

3. 第 21 回大会年度 (2025.10.1~2026.9.30) 予算案

◇松島理事より、資料 2*に基づき、第 21 回大会年度予算案が説明され、承認された。

- ・ 第 20 回大会年度の決算を受けて、印刷費と発送費を多めに計上している。

4. 役員選挙

- ◇浅井事務局長より役員交代につき案内があった。
- ・ 第 21 回大会年度で、現理事の任期(3 年)が終了するため、夏に「選挙のお知らせ」を送付する予定。

5. その他

◇湯川会長から、25 周年の記念出版事業について発言があった。

- ・ 役員交代の年度なので、新理事会の発足を待ち、新体制で若い会員に引っ張って頂きたい。
- ・ 内容案を募りたいので、案があれば、後日事務局に連絡してほしい。

◇浅野理事より記念出版の編集費(15 周年事業は宍戸初代会長の寄付を活用)について質問があった。

- ・ 湯川会長から、繰越金で対応可能との見通しが伝えられた。

◇畠山会員から、学会 HP に過去の大会一覧、会長の任期、学会の歴史を掲載できるとよいとの要望があった。

- ・ 浅井事務局長から、理事会に HP 担当が設けられておらず、運営を業者に委託しているため、実現には人員の手当て(学生アルバイト等)が必要との状況報告がなされた。

◇梶理事から、幼児教育史学会の前身「近代幼児教育史研究会」の会報について発言があった。

- ・ 会報 1~78 号(1978~2005)は当時の研究状況を伝える資料となっており、閲覧希望もあるが、執筆者に故人・連絡先不明者が多く公開許可が取れずにいる。法的に問題のない方法で公開したい。
- ・ 議長より、著作権に係わる件の対応方法につき事務局への情報提供が呼びかけられた。

※資料 1, 2 は Web 版では削除しています。

第 21 回大会を終えて

第 21 回大会実行委員長代理 松島 のり子 (お茶の水女子大学)

この原稿を書かせていただくことにもなろうとは...というのが書き始めての正直で率直な思いです。大会を終えて1か月余り経ち、改めてふり返りつつキーボードをたたいています。

2025年12月13日(土)、第21回大会をお茶の水女子大学国際交流留学生プラザにおいて開催させていただきました。前日(12月12日(金))には、関連企画1 附属幼稚園施設見学、翌日(12月14日(日))には、関連企画2 愉フォロ会を実施いたしました。2025年は本学の創立150周年の年であり、この会報がお手元に届く2026年は日本の幼児教育が150年を迎える年です。そうした記念となるタイミングで幼児教育史学会の大会の開催校として準備をさせていただいたことは、とても感慨深く思っています。

午前の研究発表には6件のお申し込みがありました。対象とされている時代も地域も事象も、それぞれの研究者の着眼点があり、幼児教育史研究の広がりや深まりとともに、その成果が確かに積み重ねられようとしていることが窺われました。

午後、今大会では、後述のように国際シンポジウムを開催したため、時差を考慮する点から、総会を先に行いました。午前中からご参加くださっていた非会員の先生方には、昼食を挟み、引き続きラウンジ等でお待ちいただくかたちになりました。

その後、休憩を経て行われたシンポジウムは、「レッジョ・エミリアの市立幼児学校と女性運動の歴史」をテーマとし、Fulda University of Applied SciencesのSabine Lingenauber先生と、Janina von Niebelschütz先生に、ドイツからオンラインでご登壇いただきました。また、参加者も形態を選択していただける、対面とオンラインを並行したハイフレックス形式で実施しました(オンラインのみ一般公開)。

第二次世界大戦後80年を迎えた2025年、戦時下のレジスタンスとしての活動し、戦後にレッジョ・エミリアの幼児学校をつくってこられた女性たちへのインタビューを映像資料として残され、史資料の収集・分析とあわせて、歴史を「歴史」として明らかにし、発信されている研究成果は、内容もさることながらその手法もとても貴重であると思えました。歴史を生きた人びとの証言が有する、文字資料とは異なる意義や価値を目の当たりにさせていただいたようにも思っています。

ふり返ってみると、第21回をお引き受けすることが決まったときにはすでに、小玉実行委員長のなかで企画の構想はほぼできていました。2025年1月にはメールでやり取りが始まり、日時と内容について相談し、より具体的な内容や資料の準備は夏ごろから本格化しました。映像資料の扱いや、日本語翻訳をつけてよいかどうか、資料の配信はどのように対応するか、開催にむけては細かな点も入念に相

談を重ねて準備を進めてきました。また、運営側では、ドイツと日本をつないだ国際シンポジウムを、会場とオンラインを並行させたハイフレックス開催とし、ドイツ語と日本語の同時通訳、途中には動画の視聴もあり...と多くの要素が重なった点で“初めて”の実施形態でした。事前のリハーサルや打合せも、限られた時間のなかで意を注いだところで

す。なお、シンポジウムについては、大会終了後、期間限定(2026年1月5日~11日)の動画配信も行いました。また、シンポジウムのなかで視聴した、日本語字幕付きの動画は、大会後に動画共有サービス(YouTube)で配信されました。

(<https://www.youtube.com/watch?v=5Yn2SuBKw7U>)。

シンポジウムの記録は、次号の『幼児教育史研究』に掲載される予定です。あわせてご確認いただけましたら幸いです。

今大会では、会場に計61名(会員43、非会員18/一般48、院生13/※1日参加・午前のみ・午後をみの参加者を含む)、シンポジウムのオンラインに146名、懇親会には23名のご参加がありました。また、株式会社 萌文書林様、不二出版株式会社様にご出展いただきました。関連企画1 附属幼稚園施設見学には10名、関連企画2 愉フォロ会には8名がご参加くださいました。

大会の準備や運営は、実行委員長の小玉亮子先生のもと、実行委員の中村美和子さんと藤谷未央さんがきめ細やかにお力を発揮してくださり、加えて、本学の学部生と大学院生のアルバイトスタッフ計8名の協力を得て進められました。さらに、研究発表の司会をご担当くださった高田文子先生、上垣内伸子先生、シンポジウムにご登壇いただいたお二人の先生と、司会をご担当くださった一見真理子先生、シンポジウムを支えてくださった株式会社 サイマル・インターナショナル様、本学の間人発達教育科学研究所やジェンダー研究所の先生方やスタッフのみなさま、関連企画にご協力いただきました、附属幼稚園の先生方や塩崎美穂先生、そして、研究発表をされた先生方やご参加くださった先生方、多くのかたがたに、多方面にわたってお力添えいただき開催できた大会でした。改めて感謝申し上げます。

わたし自身、とりわけ13日当日は“今日1日を無事に過ごせますように”と祈りながら、会場をあらこちらしておりましたので、至らぬ点が多々あったかと思えます。そうした点は、実行委員スタッフやご参加の先生方に、さり気なくサポートいただいたりご寛容に受けとめていただいたりしましたおかげで、安堵や達成感とともに終えることができました。大会のより具体的な様子は、ご参加の先生方の参加記をご参照いただけたらと思いますし、わたしも少し緊張を感じながらも、たのしみに拝読させ

ていただきたいと思ひます。

最後に、今後の参考にもなればと思ひ、大会実行委員会の事務面で気がついた点を主に2つ、記録として残しておくことにします。

〈事前申込〉今回、プログラムに申込フォームを掲載し、11月30日(大会の約2週間前)を期日として事前申込のご協力をお願いいたしました。準備に際して人数のめやすを把握したいことが大きな目的でした。おおよその目途を立てるには役立ちました。期日後に直接実行委員会宛にご連絡をくださった先生もいらっしゃる、お手数をおかけしました。それでも、当日の出席・欠席は読み切れないところもあり、何人くらいのご参加になるか、朝受付が始まっても気がかりは続きました。会員のみなさまへのご案内は基本郵送のみであり、学会HPにプログラムも掲載していただいたところですが、リマインドの手段がなく、今後学会においてご検討いただけるとありがたい点かもしれません。加えて、事前申込の期日や方法なども、運営側と参加者の双方にとって無理のないかたちを考へていけるとよいと思ひます。

〈資料準備〉研究発表者には、資料の部数を明確

にお伝えするのがむずかしくとも、おおよそのめやすを連絡することが重要であったことが反省点の一つです。事前にお伝えしていたのは、「資料を紙媒体で配付される場合、研究発表者においてご留意」いただくことと、「万一不足した場合でも、実行委員会では、印刷・増刷のご希望には応じられません」という2点でした。不足も過度な余剰もできるだけ避けたほうがよいであろうと考へたことから、事前にお問合せいただいた先生には、「60部程度」をめやすとして、それでも不足するかもしれないし余るかもしれない、という点を申し添えて返信させていただきました。この点、大会前に余裕をもってお伝えできていたらよかつたと思ひます。

＊

個人的なことながら、今回で、幼児教育史学会大会の実行委員になるのは3回目でした。その3回に限らず、どの大会も、多くのかたのご協力を得て開催できているのだということを、思いがけず回ってきた役回りを体験し、よりいっそう身にしみて実感したところです。この思いも忘れずに、今後の研究に臨み、学会の一員として微力を尽くしていきたいと思ひます。ありがとうございました。

第22回大会へのご案内

22回大会実行委員長 師岡 章(白梅学園大学)

第22回大会は、2026年12月5日(土)に、東京都小平市の白梅学園大学・短期大学で開催いたします。本学では2019年度の第15回大会以来、7年ぶり2度目の開催となります。ご参加を心よりお待ちしております。

さて、白梅学園は1942年に東京都小石川に設立された東京家庭学園に始まります。初代学園長は、一昨年のNHK連続テレビ小説『虎に翼』で主人公の恩師として登場した穂高重親先生(演:小林薫)のモデルとなった穂積重遠(元東大法学部長)でした。建学の精神として「ヒューマンイズムの理念」を掲げ、女性の教養や家庭における実際的技能を「生活の科学化・社会化・芸術化」という教育目標に基づき教育活動を展開してきました。

1950年、東京都高円寺に附属白梅幼稚園を設立。1953年には小林宗作(「窓ぎわのトットちゃん」に登場するトモエ学園長)が関わった厚生保母学園の事業を継承する形で白梅保母学園を設置し、1957年から白梅学園短期大学となりました。以来、保育者養成校として全国へ保育士、幼稚園教諭を輩出し、「保育の白梅」として広く全国に名を馳せてき

ました。

その後、短大には専攻科、心理学科、教養科、福祉援助学科が設置されました。1963年に武蔵野の面影が残る小平市に移転し、2005年には白梅学園大学子ども学部を設立。現在、四大が子ども学科、子ども心理学科、家族地域支援学科、教育学科、短大が保育科の5学科編成となっています。2008年からは大学院子ども学研究科も開設しました。小さな大学ですが、「ヒューマンイズムの理念」に基づき、社会に貢献する意思をもつ人材の育成を基軸に教育活動を展開しています。

なお、シンポジウムのテーマ、登壇者は現在検討中ですが、本学は「子どもと未来をつなぐ 新しい学びがここから始まる」というスローガンのもと、保育・教育・福祉の伝統的な学びにデジタルと環境の新しい視点(いわゆるDX・GX)を重ねた「新しい子ども学」を構想しています。こうした視点を遡上にのせ、吟味・検討していく機会ができればと考へております。詳しいことが決まり次第、学会HPや会報でご連絡申し上げます。どうぞしばらくお待ちください。

研究発表・参加記

大会に参加して

名取 奏(東洋英和女学院大学大学院)

第21回幼児教育史学会大会に参加させていただき、多角的な視点からの研究発表、レクチャー・エミリアの女性たちのレジスタンス運動を扱った国際

シンポジウムなどに触れることができ、とても実りのある時間になりました。現在構想中の修士論文では、キリスト教保育の歴史を軸に研究を進めたいと考えております。本大会に参加するにあたって、歴史研究とはどのようなものであるか、研究の方法や議論のあり方について理解を深めたいという思いを抱いておりました。

その上で一番印象に残った研究は福岡大学の勝山先生のご発表でした。クリスチャンである私が読んできた聖書解釈とは異なる聖書の読み解きがナチズムの中でなされ、現実の人々の生活に影響を与えていたという点です。勉強不足で恥ずかしい限りですが、幼い頃から教会で育った私にとって、聖書の教えが歴史において悲しい出来事に利用されていたことを意識したことはありませんでした。

勝山先生が翻訳された『緑の野の狐を信じるな、ユダヤ人の誓いを信じるな』には、神がユダヤ人という邪悪な人種を考えだしたという内容に始まり、文中に聖書を根拠にしていると読み取れる表現がありました。私がもし当時のドイツに生きた子どもでこの絵本に出会ったならば、「聖書に書いてあるならこのことは正しいのだろう」と絵本の内容を素直に受け取り、ユダヤ人は悪だと思い込んでしまったのではないかと感じました。

勝山先生の研究から、幼児教育において用いられる教材や語りが、子どもの価値観の形成にどれほど大きな影響を与えるのかを改めて考えさせられました。特に、宗教的な言葉や権威ある書物が用いられる場合、その内容を批判的に受け止めることが難しい幼児期だからこそ、保育者や社会の責任は非常に重いものだと感じました。この絵本が当時の保育の場でどの程度読まれていたのかは不明ということでしたが、保育の場に必ず存在し、子どもに少なくとも影響をもたらす絵本であるからこそ、子どもや子どもを取り巻く社会に与える影響も非常に大きかったのではないのでしょうか。

聖書は私にとってよりよく生きるためのヒントを得られる書物であり、幼い頃から、さまざまな判断の基準になる「良い面」のみを読み解いてきたテキストでした。しかし、歴史上には、立場の異なる聖書の読み方が存在し、時には、人を支配する道具として利用されていた事実があることを知り、研究を進める上できちんと学ばなければならないと痛感しました。そして何より、聖書の教えが自分にとって大切な価値観であっても、歴史研究においては歴史資料としてテキストを読む姿勢が必要であるということを知りました。この点は、これから修士論文の研究を進める上で意識して大切にしていきたいです。

本大会への参加を通して痛感したことは、幼児教育史を「過去の出来事」ではなく「現代への問い」として学んでいきたいということです。まだまだ未熟な私ですが、これからも学びの場を大切にして保育と向き合っていきたいと思っております。

第 21 回大会に参加・図書展示させていただいて 赤荻 泰輔（萌文書林）

『保育を綴る：対話型マップ記録の提案』（お茶の水女子大学附属幼稚園幼児教育研究会編著）のお披露目となった 8 月 30 日の「お茶幼カフェ」で小玉亮子先生にごあいさつしたところ、第 21 回大会の実行委員長を務めていらっしゃる、国際交流留学生プラザにおいて対面で行われることをお聞きして、さらに弊社に出版を勧めてくださいました。事務所（文京区本駒込）から至近距離で行われる対面の大会であり、また貴学会の 15 周年記念研究書『幼児教育史研究の新天地』（上・下巻）の版元というご縁もあり、ひさしぶりの出版を決めました。

大会当日の天気予報は、あいにくの晴れのち雨という予報でしたが、幸い雨が落ちることはありませんでした。大会への参加手続き、車両による搬入にあたっては、中村美和子先生の細やかな手引きによりスムーズに行うことができました。また、大会は松島のり子先生をはじめとする実行委員の先生方のご尽力により、アットホームで温かみのあるものとなりました。

午前中の個人研究発表では、出版社で働くものとして『「岩の坂貫い子殺し事件」（1930 年）に関する新聞報道とジャーナリズム：「貫い子殺し事件」のミクロストリア』（浅野俊和先生）、『ナチス・ドイツの幼児教育にみられる反ユダヤ主義：絵本『狐とユダヤ人を信じるな』を中心に』（勝山吉章先生）を興味深く拝聴しました。ジャーナリストによる記事の虚構であったり、絵本が幼児期の子どもに偏見や憎悪を植え付ける触媒となったりすることを、自分が現在かかわるマスコミ業界が与える社会への影響と併せて深く考えさせられました。

シンポジウムのテーマは、「レッジョ・エミリアの市立幼児学校と女性運動の歴史」でした。オンラインでドイツと結び、Sabine Lingenauber、Janina von Niebelschütz 両先生の講演を拝聴しながら製作されたビデオを拝見し、司会の一見真理子先生のもと、指定討論者の小玉亮子先生の議論を聴く機会を得ました。日本では子どもの造形教育的な文脈でレッジョ・エミリアが取り上げられ、一般的には理解されていますが、その根底には戦争下のレジスタンス運動や、戦後の女性たちの運動、幼児教育への哲学が深くかかわっていることが貴重な証言と共に理解できました。

出版社としては、図書展示を通して弊社の刊行物を先生方に実際に手に取っていただくことが叶いました。貴重な機会をいただいたことに感謝いたします。これからも学会の会員・参加者の皆さま方にご指導を賜り、意義深い書籍の刊行活動に勤しんでまいりたいと存じます。どうぞよろしく願いいたします。

幼児教育史学会 大会参加記

田中 茉莉子（東京大学大学院・院生）

東京大学大学院・院生の田中茉莉子と申します。2025年度より貴学会に入会させていただき、12月にお茶の水女子大学にて開催された第21回大会において発表の機会をいただきました。このたびは、大会参加記および自己紹介の機会を賜り、ありがとうございます。

私は、幼児教育における園と家庭のパートナーシップの構築に関心を持ち、研究に取り組んでおります。今回の大会では、「1960年代イタリアにおけるAda Gobettiの思想がレッジョ・エミリア教育に与えた影響」という題目で発表を行いました。

レッジョ・エミリアの幼児教育において「親の参加」という概念は重要な役割を果たしてきましたが、その理論的・歴史的背景については、これまで十分に検討されてきたとは言いがたいと考えています。レッジョ・エミリアの幼児教育の歴史を整理した書籍『One City, Many Children』（Reggio Children, 2012）において、「親の参加」の概念や実践に影響を与えた人物としてAda Marchesini Gobetti（アダ・ゴベッティ、1902-1968）が挙げられていることを手がかりに、本研究を進めてきました。

ゴベッティは、第二次世界大戦期にレジスタンスとして活動し、戦後にはトリノ市副市長を務めました。その後、1959年に雑誌『Il Giornale dei Genitori（親の新聞）』を創刊し、親の教育的・社会的役割について継続的に発信を行った人物です。発表では、彼女の著作や雑誌を通じた言説がどのように展開・変化していったのかをたどり、それらがどのようにレッジョ・エミリアの幼児教育の中に位置づけられていったのかについて報告いたしました。

発表後の質疑応答や懇親会では、多くの先生方から貴重なご意見やご質問をいただき、大変有意義な学びの機会となりました。対面での学会発表は今回が初めてでしたので、直接お話しする機会を得られたことを、大変ありがたく感じております。

また、午後のシンポジウムでは、ドイツにおけるレッジョ・エミリア教育研究を行っておられるSabine Lingenauber氏および共同研究者のJanina von Niebelschütz氏のご講演を拝聴しました。自身の研究とも深く関わる内容であり、大変示唆に富むものでした。とりわけAda Gobettiに関する言及があった際は、強い関心を持ってお話を伺うことができました。

なお、今回発表した内容は、先日提出した修士論文の一部としてまとめることができました。今後の研究では、個人の意識に委ねられがちな「親の参加」がどのように園の中で、さらに社会の中で制度化され、実践として位置づけられていったのか、その難しさと形骸化の危機と、それに対する更新の試みの歴史から検討していきたいと考えています。日本においても、親が園に関わってきた歴史があり、研究が積み重ねられてきました。こうした日本の文脈と

も往還しながら、研究成果を還元できるよう、今後も研究を続けてまいりたいと思います。

今後も貴学会での議論に積極的に参加し、研鑽を積んでまいりたいと考えております。今後とも、ご指導ご鞭撻のほどどうぞよろしくお願いいたします。

幼児教育史学会第21回大会に参加して

渡辺 一弘（島根県立大学短期大学部）

お茶の水女子大学で開催された第21回幼児教育史学会大会に、研究発表のみ参加させていただきました。私自身の専門は、大学院時代は教育社会学研究室で歴史研究として、中等学歴から見た地方エリート研究、学校文化研究を中心に取り組んで来ました。幼児教育との関わりは、学部時代の2年間幼児教育学科に所属しており（途中で教育学科に転科）、初職で私立の保育者養成校の短大に就職してから本格的に始まりました。

今回の研究発表の中で、特に私が興味を引かれたのは最初の発表の「「活水女園」の歴史」（前田志津子）と、5番目の発表の「戦後のキリスト教保育者養成校における夜学の役割—保育専門学校との必要性に着目して—」（中村早苗）です。前者の発表については、先ず活水学院自体に興味がありました。私は修士論文で熊本県を事例にして、中等学歴から見た地方エリート研究を行ったのですが、分析資料である『熊本人名録』（熊本日日新聞社、1986）において、島原半島対岸の天草出身の地方エリートと定義した男性たちの配偶者やご息女に活水学院の出身者が散見されたこと、私の父のルーツがこの天草にあったこと等からです。発表を聞いて、細かい史資料を基に丹念に調べられていて、活水学院のアーカイブズとして貴重な研究であると思いました。その反面、他の方からの質問にも有りましたが、活水女園自体の内容には具体的にほとんど触れてなかったのが残念でした。史資料の新たな発掘は大変困難なこととお察ししますが、是非、今回は、具体的な内容に少しでも言及していただければと思いました。後者の発表については、発表題目から素朴に、戦後のキリスト教保育者養成校に夜学があったのかという疑問と、現在、1950年代-70年代初頭にかけて存在した大学の小学校教員養成課程、幼稚園教員養成課程の2年制カリキュラムについて少し調べていることとも関係があったからです。各時代毎に詳細な図表と説明で、レジュメの説明について行くことは大変でしたが、キリスト教系保育者養成校=裕福なイメージ、からの夜学という展開が少しは理解できたかなと思いました。「まとめと今後の課題」に書かれた内容の後半部分は、私が所属している地方公立短大でも当てはまる部分と、4年制国公立大に落ちたからここに来たので編入試験を受けたいという学生の層が混在している勤務校において、改めて学生指導の複雑さを実感しまし

た。その他の発表では、4番目の発表「1960年代イタリアにおける Ada Gobetti の思想がレッジョ・エミリア教育に与えた影響」（田中菜莉子）に興味をもちました。インタビューの手続きや背景等をもう少し詳しく聞きたかった（できれば表で示して欲しかった）のと、「6. 本研究の課題と今後の展望」で挙げていた、ミレッラさんの語りの位置付けというか、捉え方の補足説明が欲しかったです。

拙い参加記になりましたが、参加させていただき、今回も刺激をいただきました。有り難うございました。

大会に参加して

寒河江 芳枝（帝京大学）

第21回大会「幼児教育史学会」に参加させていただきました。帝京大学の寒河江芳枝と申します。今回、私は金田利子先生（静岡大学名誉教授）、齋藤政子先生（明星大学教授）とご一緒に「戦後（1960年代から2020年頃）乳児保育を巡る論点の変遷と歴史的考察—金田利子らの乳児保育に関する著作を資料として—」と題し口頭発表をさせていただきました。

これまで、日本保育学会、日本乳幼児教育学会、日本家政学会、日本発達心理学会などにて発表等をさせていただいておりますが、今回初めて「幼児教育史学会」に参加させていただき、発達についても歴史的にみることの大切さに大きな示唆を得ました。

私が、今回発表させていただいた経緯は共同研究者であります金田先生と研究発表を行うことがきっかけでした。本日は、新入会員として自身の研究の概略について書かせていただきます。私は、2008年に白梅学園大学大学院の修士課程に入学した際に金田先生のゼミに所属しました。当時、私は2003年に誕生した甥Yの記録を取り続けておりましたが、どのようにまとめるべきか悩んでいた際に金田先生に研究のご相談をしたことから研究をみていただくことになりました。

金田先生のゼミに所属する中で甥Yの記録の何に焦点を当てるか検討した結果、子どもはどのように葛藤をのりこえていくのかという視点に興味関心を抱きました。改めて検討していくなかで、甥Yの葛藤は発達で言われているような過程を経ていることが明らかになってきました。その中で特に注目した行動が、修士論文を執筆する中でみられた「迂回」行動でした。「迂回」行動とは、3歳前後の子どもたちが相手の気持ちを読み取るようになり、そのことから相手の要求と自分の要求が異なる場合、自分の気持ちを間接的に伝える行動です。具体的に言うならば、直接的に「いやだ!」という気持ちを伝えることによって相手との関係がスムーズにいかなくなることを理解するようになると、相手の気持ちを損ねないような行動を示します。例え

ば、給食に出たミニトマトが食べられない場合、「ミニトマトを食べたくない」と保育者に伝えると保育者から食べるように要求されることを理解していることから、急に「おなかがいたい」などと本当ではない自分の気持ちを相手に伝えるようになるのです。これは、その子どもをしっかりと見ている保護者（保育者）ならば、その言葉はその子どもの本当の気持ちを表しているわけではないことが分かります。

修士論文でみられた「迂回」行動については、一人の子どもの行動であり一般化できないことから博士課程に進みました。博士課程の最後の年は、これまでの指導教員がサバティカルになり、近藤幹生先生のゼミに所属し、論文の主査は無藤隆先生でした。観察では、満3歳児クラスの子どものたちの行動を追うことから「迂回」行動があるかどうかの検討を行いました。その結果、一クラスではありますが、クラス全員の子どものたちに「迂回」行動が見られました。この観察をまとめ、2019年3月に「乳幼児期の要求表現にみられる迂回の意味—子ども主体の保育を目指して—」というタイトルで博士論文を執筆しました。

私は、大学を卒業してから幼稚園教諭となり、その後、研究の道へ進みました。まだまだ、研究者としては未熟ではありますが、発達を歴史的観点からも研究を発展させていきたいと思っております。皆さま、今後共どうぞよろしくお願ひいたします。

大会参加記

上垣内 伸子（元 十文字学園女子大学）

幼児教育史学会初参加となった第21回大会。大会前日のお茶の水女子大学附属幼稚園施設見学、大会当日の研究発表と総会を挟んでの午後のシンポジウム「レッジョ・エミリアの市立幼児学校と女性運動の歴史」、そして懇親会に参加させていただきました。どの企画も刺激的なものでありましたが、ここでは研究発表について、雑駁ではありますが、感想を書かせていただきます。

1演題30分というじっくり語る発表と質疑応答、さらにすべての発表後に1時間のディスカッションという“熱い”午前中の研究発表に圧倒されました。10分程度の口頭発表やポスター発表、オンラインでの発表がもつぱらで、時間に追われながらコンパクトにまとめて発表するのが常である身にとっては、大部の資料を手にも物語を読む/聞くかのような、興味深い体験でした。

前田先生の「活水女園」の歴史、中村先生のキリスト教保育者養成における夜学の役割のご発表は、ご自身が所属する学校の歴史を取り上げたものでした。私は、保育学に足場を置きながらも、障害のある子どもの発達相談という臨床の仕事をこれまで続けてきました。臨床の分野では、ワンケーススタディはその深さと詳細さによって、大規模集団を

対象とする調査ではとらえきれない新たな知見、本質的な課題が見出せると位置づけられています。歴史研究においても、特定の組織のありようを丁寧に分析することで、そこから普遍的な意味が浮かび上がることに興味を覚えました。そして、浅野先生の「岩の坂貫い子殺し事件」のご発表からは、マイクロヒストリーが社会のつくる大きな物語の中で都合よく料理されてきた真実をあぶり出すことにも興味を覚えました。

午後のシンポジウムで取り上げられたレヅジョ・エミリアでの保育園作り“brick by brick”に象徴されるように、一人そしてまた一人と市井に生きる人間の営みが歴史を作っていくのだなど。午後のシンポで指定討論の小玉先生が、キーワードは民主主義

と権利とおっしゃっていましたが、シンポだけではなく、午前中の研究発表を含む大会全体を通して、歴史を扱うことは民主主義を土台に人権を擁護することなのだと感じた次第です。

研究発表の最後は、金田先生がご自分の1960年代からの研究を総括し、「視点が常に生活者の要求からそこにある矛盾を越えていこうとする事で、市民の要求が研究の下地にある」と分析なさっていました。現状におもねるのではなく、常に先を見通し仲間と連帯しながら矛盾を越えていこうとする姿勢をもっているか——わが身に問いかけながら大会の一日を終えることとなりました。これからも、どうぞよろしくお願いいたします。

愉フォロ会報告 (2025年12月14日)

塩崎美穂 (東洋英和女学院大学)

海外の幼児教育史の研究動向を愉しみながらフォローする会(通称「たのフォロ会」)を、例年通り、学会開催日翌日の午前中に行うことができました。そもそも本研究会は、宮澤康人先生の発案により、海外の幼児教育史の研究動向を共有することを目的に始まったものでした。いかなる地域のどんな切り口からの研究でも、先行研究としての研究動向を抑えることが不可欠です。先行研究の文脈のどこに自らの研究が位置づくのか、それを把握することなしに研究をすることはできません。一人ではなかなか進めることのできない研究動向整理を共有し、共に学び合う場としての本研究会の意義を忘れずに、細々とでも、今後も続けていければと思っています。今回は修士論文を書き終えたばかりの福島さんに研究発表をお願いしました。

海外の幼児教育史の研究動向を愉しみながらフォローする会での発表を終えて

福島 友 (学校法人大宮福島学園植竹幼稚園／東洋英和女学院大学大学院修士課程修了)

今回の、海外の幼児教育史の研究動向を愉しみながらフォローする会の発表が私にとって初めての研究会(学会)での発表となりました。

発表内容は、東洋英和女学院大学大学院修了に際し執筆した「幼児教育と小学校教育の接続において躓きを引き起こしやすい価値観の違い—保育内容領域「言葉」と学習指導要領「国語」のカリキュラムと実践の比較から—」という修士論文を中心に構成しました。

この論文は、「保育者」と「教師」が持っている価値観の差異が、保育の場から学校へ移行する子どもに現れる〈接続の躓き〉を引き起こしやすくなっているのではないか、という問いから出発しました。

幼稚園・保育園から小学校へ移行することによって生じる、生活や環境の変化は、子どもたちが学校での「教科」という学びに向かっていく上で必要かつ大切な段差です。しかし、それは同時に、それまで園で過ごしてきた子どもたちにとって、うまく前に進むことを妨げる〈躓きの段差〉にもなるだろうと考えます。現在に至るまで、幼小の接続期に関しては、文部科学省の大きな関心事として議論および対応が続いていますが、未だ私たちには幼小をなめらかに接続させるための明確な手立ては見つかっておらず、「幼小の接続期」に関しては更なる検討が必要だと考えられます。

幼稚園教育要領における保育内容要領「言葉」と小学校学習指導要領における教科「国語」の比較を通して幼小の実践者がそれぞれ前提としている教育的価値観の違いがある。その違いの中に、子どもが保育の場から学校へ移行する際の「躓き」につながっている部分があるのではないかと。そうした仮説をもとに、幼小の価値観の違いについて明らかにしようと思いました。

当日は、あいにくの雨模様であり、学会の翌日もありましたが、参加者の皆様には様々なご意見や、新しい視点をいただきました。本当にありがとうございました。

今後は、質疑応答の中でご助言いただいたように、小学校における「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」などの評価の観点を明確に示し、保育における評価の在り方との違いをより詳しく具体的に示しながら、「幼小接続」の可能性を探っていきたいと思います。また、発表の中で「躓く」という言葉を多用しましたが、様々な議論を通して、何に躓いているのか、躓きとカリキュラムを一緒に考えて良いのか、小学校での生活指導や、教材の中にもその躓きを引き起こしやすい教師側の価値観が見えてくるのではないかなど、多くの示唆をいただきました。

いまは、学童保育の待機児童問題に端的に表れている通り、そもそも小学生の「子どもたちの居場所

がない」ことが課題でもあります。どこに軸を置いて接続を考えていくのか、まだまだ課題はありますが、これから生きる子どもたちの力に少しでもなれるよう、日々の保育現場で、また、研究や論文と

いう形で貢献していきたいと思います。自分の気持ちを再度確認する機会にもなりました。発表の機会を下さった皆様に感謝いたします。ありがとうございました。

新入会員・会員異動（2025.6.15～2026.2.5）

省略

寄贈図書（2025.7～2026.2）

- ・ 豊田和子・清原みさ子・寺部直子・榊原奈々枝『戦後初期の保育カリキュラム』新読書社、2025年10月。
- ・ 韓国保育振興院、上原真幸・金珉呈・勅使千鶴・韓仁愛訳『2020 改訂 保育教師2級資格取得のための教科目標準教科概要』ひとなる書房、2025年3月。

機関誌編集委員会からのお知らせ

『幼児教育史研究』第21号への投稿論文(研究論文・研究ノート)を募集いたします。論文は、2026年5月1日から5月31日までに事務局宛にメールでお送りください。詳細については、学会ホームページ掲載の投稿要領をご確認ください。多くの皆さまからのご投稿をお待ちしております。

事務局からのお知らせ

1) 会費納入のお願い

本学会の会計年度は、10月1日から翌年の9月30日までです。宛名シール上に記載された未納分年度をご確認のうえ、ご納入ください。シールの記載がない会員は完納状態にあります。本状と行き違いでご納入の場合には、何卒ご容赦ください。

年会費： 一般会員 7,000 円 特例会員(学生・退職者等) 4,000 円
送金先： 郵便振替 00190-9-73668 加入者名： 幼児教育史学会

2) 所属・住所などの変更届けに関するお願い

変更が生じた場合は、どうぞもれなくメールにて下記の学会事務局までお知らせください。

3) メールアドレス登録のお願い

イベントのお知らせなど、学会事務局からの連絡のために、送信専用のメーリングリストを作成する予定です。メールアドレスをご登録頂いていない方は、事務局までメールでアドレスをお知らせください。

幼児教育史学会会報 第41号 2026年2月17日

発行者 幼児教育史学会

113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学大学院教育学研究科 浅井 幸子研究室気付
幼児教育史学会事務局 E-mail: admin@youjikyokushu.org 郵便振替 00190-9-73668

編集 榊 瑞希子 印刷 (株)木元省美堂